

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
古田キミエ	女 性	2 6 歳	あま市 (設楽町田口)

まんもうかいたく
「満蒙開拓の思い出」

「平和の礎 海外引揚者が語り継ぐ労苦」より転載

1980年頃の手記 (部分修正)

私は戦争の激化した昭和15年に、北設楽郡設楽町田口から「大陸の花嫁」として、村人に見送りを受け、満州への一步を踏み出しました。まるで出征兵士のようで、私が21歳の秋でした。途中、海老の主人の家に寄り、親族をまじえて結婚式のかたちだけを取りました。主人の家で1泊した後、豊橋から汽車に乗り、下関に着いたのは3日後でした。

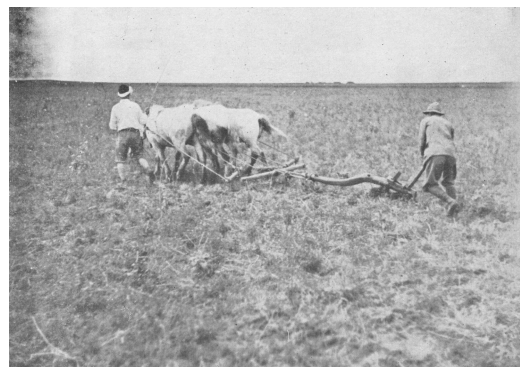
その日のうちに釜山行きの船に乗りました。出港の汽笛と共に船が港を離れる時は、陸地が見えなくなるまで甲板に立ち、親とも別れ、これから起きることを知るよしもなく、ただ涙があふれて止まりませんでした。船中に1泊して釜山に着きました。遠い外国に来たような心細さがわきました。

釜山からハルビン、チチハルを経由して、3日目に目的地の大平山村三合屯開拓団に着きました。10月半ばというのに、震えるほど寒く、荒涼とした大平原の中、開拓の集落だけが遠く点在して見え、「大陸の花嫁」と歌った、希望に燃える新天地とはほど遠く思え失望していました。

家は、満州人の古屋で、1軒に夏目さん、稲熊さんと私たち同郷から来た3家族が入りました。草ぶきの屋根と泥壁の粗末なつくりでした。海老班という班を作って、共同炊事、共同農作業が始まりましたが、まだ開墾の段階で、作物はとれませんでした。

翌年の8月に、夏目のおばさんの助産婦のもとで、長女の由子が生まれ、皆様にかわいがってもらいました。しかし、その年の12月には、予期しなかった主人への召集令がきて、出征していきましました。満州の冬は零下30度を下回るほどで、水が衣服につけばすぐに凍ってしまうような厳しい寒さの中、由子をおぶって野良仕事に出かけました。由子が泣いて、私も泣きながら主人の身の上を案じる毎日でした。

昭和16年に太平洋戦争が始まると、開拓団にもぼつぼつ召集が来るようになりました。治安上、満州人には知られたくないと、内々



「耕運」 拓務省満州移民写真帳(昭12頃)より

で出征していきました。やがて開拓団は老人や子供連れの女ばかりになり、大きな馬や牛を使い切れず、飼育もできないので殺していきました。

昭和20年7月には、満州に駐屯していた関東軍は南方に行き、職業軍人の家族はすでに日本へ引き揚げをしていたということです。満州人や朝鮮人は日本が戦争に負けると知っていました。8月9日にソ連軍が満州国境を突破してきました。私たち開拓者は、日本の国策により、ソ連と満州の国境警備と戦時下の食料増産のため、黒龍江省一帯へ移民させられましたが、満州の大陸で死亡したり、孤児になったり、戦争によって多くの人々がここに捨てられたのだと思いました。

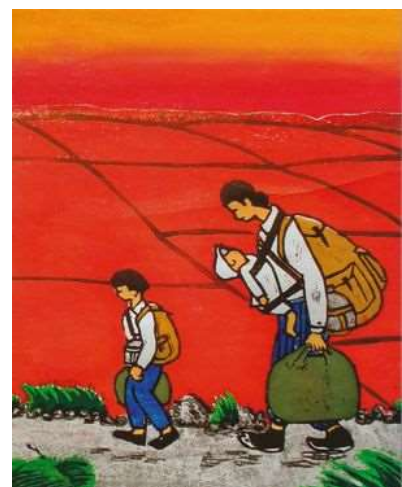
8月15日の終戦は、少し後で知りましたが、開拓団の人々は本気にはしませんでした。そのうちに、満州人が日本人の家の中の物をすぐに持っていきようになり、次第に治安が悪くなり、殺された人もいました。敗戦とともに、彼らの態度はがらりと変わりました。そして匪賊の襲撃が始まりました。開拓集落ごとに全員交代で警備につき、匪賊が来そうだと情報が入れば、子供をおぶって野原の大きな草かげやくぼ地に身をかくし、見張りの人がもう匪賊がいないと連絡してくれるのを待ち、家に戻るといことが続きました。匪賊の襲撃のたびに、子供の泣き声を静かにさせると叱られたり、老人は「もう死んでもよい」と、家に残る人もいました。集落に戻ると、病人や老人は殺されてはいませんでした。布団や衣類、食料などはすべて持ち去られていました。

満州の警察と公安隊が、日本人全員を本部前に集め、身体検査と言っては、男女の別なく衣服を脱がし、その場でよいものを着ていけば脱がして持っていき、反抗すれば即刻銃殺されました。飼っていた馬を取り押さえようとしたら、逃げると思われ、全員の前で銃殺された人もいました。

匪賊の中には銃を持っていない者もあり、刀や槍を持って襲撃してきます。このとき、夏目宗八さんが応戦して槍で突き刺され、大変な傷を負いました。開拓団の中に元看護婦の方がおられ、手元の救急箱でなんとか傷口を縫い、一命をとりとめました。

この三合屯開拓団も死者や傷ついた人が増え、ここを引き揚げ、近くにある東陽開拓団へ行くことになりました。移動する時の私の持ち物は、子供のねんねこ1枚と自分の少しの着替えの風呂敷包み一つでした。

いよいよ出発の日、ある女性が私に、「一人で二人の子を連れて行くのは無理だから、下の子を門の所に置いていく。」と言いました。私はとても驚いて、死ぬ時は親子いっしょだからと話しました。子供の側を離れず歩きました。しかし、このとき子供を連れて行け



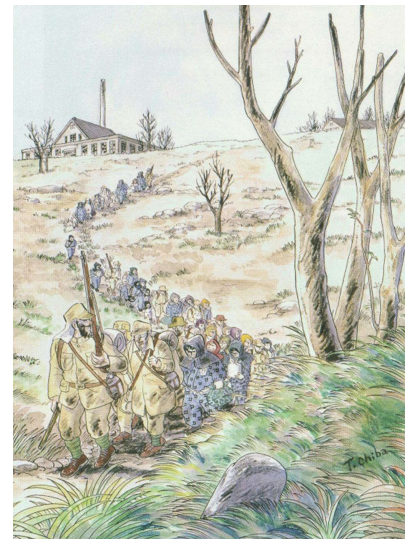
向井久美子 「夕焼けの大地」より

ば途中^{とちゆう}で死ぬ^{しぬ}だろうから満人^{まんじん}にくれてやろうと考える人、親が病気で連れて行けない人、満人^{けんじん}と結婚^{けつこん}する女性^{にょせい}などがいました。バラバラな行動でありましたが、大きな団体^{だんたい}となって移動し、東陽開拓団に着きました。

学校の校舎^{こうしゃ}を借りてお世話^{せわ}になることができひと安心^{あんしん}でした。しかし、食べるものはなく、開拓団の人が刈り残した稲^{いね}を元気な人で刈り取り、食べました。11月の半ば過ぎ^す、ここでも匪賊^{ひぞく}が来るようになり、病人の布団^{ふとん}をはぎ取り、何か出せと火^{まき}のついた薪^{まき}で男の人をたたくなど、悪事^{あくじ}のし放題^{らんぼう}でした。取られる物もなく無抵抗^{むていこう}でありますとそのうちに帰って行きます。「女を出せ」と乱暴^{らんぼう}されたこともあります。少したったころ、中央軍と共産軍の戦いがあり、共産軍が勝ちました。東陽開拓団にも共産軍が入ってきて、生きた気がしませんでした。何と日本語で私たちの行動^{しぎ}を指揮^{しき}してきました。匪賊^{ひぞく}が来なくなり、少し心にゆとりが持てました。

しかし長い間の大勢^{おおぜい}での生活^{せいかつ}で、やはり食べものはなくなりました。滝川^{たきかわ}さんという方がいらっしゃって、その方は満州人^{まんしゅうじん}に信頼^{しんらい}がある方だったので、満州人の家に仕事の世話を^{せわ}していただき、そこで働き、食べ物^{たべもの}をもらっておりました。しかし、それはかつての日本人^{にっぽんじん}としては恥ずかしい姿^{すがた}でありました。そのうち治安^{ちあん}も少しづつよくなり、チチハルまで戻れることになりました。

1日でも早く日本へ帰りたくて、私は由子^{ゆうこ}をおぶって、20人あまりの人たちと共に行列^{ぎょうれつ}を作って、チチハルへ向かって歩きました。由子をおぶって歩くので、不自由な歩き方をしていると、二人の兵隊^{へいたい}の方が助けてくれました。夜になると、滝川さんが交渉^{こうしやう}してくれ、満州人の家に泊めてもらいました。作業小屋^{さぎょうせう}を借りたり、野宿^{やじゆく}をしたりして4日間歩き、雄牛屯^{ゆうぎゅうとん}に着きました。



ちばてつや 「ボクの満州」より

雄牛屯の満州人^{なんみん}たちはいい人たちでした。どうせ難民^{なんみん}生活^{せいかつ}をしていて、いつ帰国^{こくこく}できるか分からないなら、寒いチチハルへ行くより、暖かい春^{はる}をここで待つ^{まち}てはとってくれる人がおりました。そこで、皆^{みな}で分散^{ぶんさん}して満州人の家に置いてもらい、ここで働きながら春を待つことにしました。

ここにいる間、ロシア兵^{ろしあへい}は、日本人を見たら殺すと銃^{じゆう}を向けてきました。満州人たちは、ロシア兵が来ると、私^{わたし}たちをいっしょに仕事場^{しごとば}に連れて行き、日本人はいないと言ってくれたこともありましたが、途^と中^{ちゆう}、発疹^{はつしん}チフスにもかかったりしましたが、よく看病^{かんびやう}してもらい治りました。

5月の初めに、再び^{ふたたび}チチハルへ向かうことが決まりました。私たちは、働いた

代金をもらってチチハルに向かいました。道中ぼろぼろの着物を着て歩く私たちを見て、道ばたの満州人たちが笑っていました。子供を売れとも言われました。みじめな姿をさらけ出し、「戦争に負けたのだ」と実感し、何とも情けなく、また腹立たしかったのですが、知らぬ顔をして歩きました。

待ちわびたチチハルに着き、吉野屋という元旅館に入りました。滝川さんが日本人会へ行き、コウリャンとおかず代を、

わずかでしたがもらってきました。滝川さんは家族の待つ平陽に帰って行きましたので、後は自力で働いて引き揚げの日を待ちました。朝は豆腐屋で豆腐を売り、昼間は満州人の家で洗濯を1枚5銭でやりました。満州人に知り合いも増え、少しずつお金を稼ぎました。しかし、病気で働けない人は医者にも診てもらえず、薬一つあるわけでもなく、やせ細って寝ているだけで、ただ死を待つばかりでした。



当時のチチハルの日本人街 「満州帝国の興亡」より

三合屯から来た人の中からも、病気の人が毎日か、あるいは週に2、3人は死んでいくようになりました。死体を埋めに日本人墓地へお手伝いについて行きましたが、死体は、浅く、申し訳程度に埋めてあるだけで、今にも手や足が出てきそうな土盛りの墓が見渡す限りありました。生き地獄とはこのことかと思いました。敗戦後の悲惨な引き揚げの中で、家族のことに思いを寄せながら死んでいった人の心境は、いかばかりかと察して、同情の涙が止まりませんでした。私も子供連れなので、もし私が死んだらと、同じ町の出身の人に子供のことを何度も頼んでおきました。

21年の9月になって、いよいよチチハルにいる人たちの引き揚げが始まりました。引き揚げていく人たちが持っていた余分な着物などは、後にチチハルに出て来る人のために置いていきました。日本人の心遣いです。おかげさまで、私のようなぼろぼろの着物の者も少しはよい着物で帰ることができました。

私たちは10月の初めに帰ることになりました。私の荷物は、子供と二人で食べるものを少し持っただけです。ただただ日本に帰れることがうれしくて、気にもなりません。

引き揚げ当日の朝早く、チチハル駅にみな集合しました。そこである家族を見て驚きました。昨日までおぶさっていた女兒がいません。尋ねると、満州人にくれてきたとのこと、何ともいえない気持ちになりました。親の気持ちはそれぞれで、このような状況では仕方がないと思いつつも、涙があふれて仕方ありませんでした。

三合屯の人はみんなどうなったのでしょうか。中には置き去りになった子供、引き揚げ途中で不明になった人、殺された人、病気で死んだ人、主人を召集で取られたままの妻、運よく生き残れた人だけが、それぞれの思いを抱いて最後の別れとなる黒龍江省チチハルの駅へ集結してきました。未解決な事情を残してこの地を去ることは、心残りが尽きません。

引き揚げ船の出るコロ島まで、また長い旅でした。チチハルから貨物列車に人をいっぱい詰め込んで、バケツの便器を隅に置いて出発しました。帰れることがうれしくてだれも苦になりませんでした。何日か過ぎて乗っていた貨車の中で、何人か病気で死にました。途中貨車が止まった時、死体を野原に置いて、また発車しました。死んだ子をおぶって貨車が止まるのを待っている母親もあり、あまりにも悲惨でした。1週間ほど過ぎたころ、鉄橋の線路が外してあり、中央軍が逃げるためにしたということで、そこから先は、大勢の人に遅れぬよう歩き続けました。

このような時に見た光景ですが、3、4歳ぐらいの二人の兄弟が、道ばたで泣いて助けを求めていましたが、私も由子を助けてもらっている身でどうにもなりません。後で、隊長と役員が二人を連れてきたと知り、自分のことのようにうれしかったものです。そのうちに、迎いの車が来たので、女の子と子供の周りを男の人に囲ってもらって車に乗り込み、また長い旅が始まりました。何日かたってコロ島に着きました。ここの収容所には大勢の人が入っていました。1週間待ち、女の子が急死したので、さらに1週間船に乗るのが延びました。



向井久美子 「夕焼けの大地」より

ようやく待望の引き揚げ船に乗れました。乗船できた感激は一生涯忘れることはできません。このときの配給は、乾パン10個、子供に5個、水ばかり多いおかゆでいつも空腹でした。船の中で死んでしまう人も何人かいました。私のような子供連れの女は、何かにつけて人様の足手まといと言われてきたので、常に気を張っておりました。

やがて待ちに待った祖国の博多の沖に停泊し、うれし涙を流す者、大きな声を上げる者など、みな気持ちが高ぶっておりました。船の中で死者が出て、上陸が1週間延びました。海の上から博多の夜景を見て、本当に帰って来たのだと思いながら、故郷の設楽町の実家がどうなっているか、召集で行った主人は生存しているかなど心配事でいっぱいでした。船中で入国検査を終え、シラミ取りのDDTを頭から真っ白くなるほどかけられ、船を降りました。

夕刻、博多の宿泊所に行く途中、道ばたに石塔を二つ並べて鍋で何か煮ている人を見ました。幸島さんが「おい、これを見よ。これが日本の負けた姿だ。」と

言いました。宿泊所でいただいたおにぎりのおいしかったことは今でも忘れていません。

博多から名古屋へ向かう汽車の中で、大はしゃぎの人がおりましたが、私は主人の安否がやはり気がかりでした。2日目に名古屋に着き、そこで1泊して名古屋の町を見て驚きました。町の形はなく、焼け野原で、私の想像をはるかに越えるものでした。

その日のうちに私の実家へ戻りました。故郷の山河はただただ懐かしく、実家の戸を開け帰国のあいさつをした時は、泣けて泣けて何を言ったのか、今も思い出せません。兄から、主人が無事帰っていることを聞き、本当によかったと安心しました。翌日、主人の実家へ向かいました。家族もみんな元気でおりました。

やっと家族で暮らせる日が来ましたが、今後の職業をどうするか、親戚の人にも力になっていただき相談をしました。主人の父が知り合いの人から空き家を借りてくれて、そこに住むことになり、初めて身も心も平和な新婚生活に戻ることができました。しかし、山の中で時折鉄砲の音がすると、由子が匪賊が来たと言いきり泣き出し、幼い子供心の傷は長く尾を引いていました。

引揚げ者に何の貯えもあるはずがなく、親戚、知人に仕事を頼んで生活をしていかなければなりません。このままでは恥ずかしいと思いつつ、その一方では、国のために、戦争のためにこうなったのだから、乞食同然で帰国してきても恥じるべきでないと、自分に言い聞かせてきました。主人は日雇いをして生活を支えてくれましたが、親戚にも迷惑をかけてしまうし、実家に戻るわけにもいきません。みじめさを感じるようになってきて、よその土地に行って生活したいと考えるようになりました。

昭和22年、東三河の満州からの引揚げ者29人に人たちと共に、愛知県庁に、北設楽郡設楽町段戸の山に、開拓者として入植したいと申請をしました。名古屋営林局の土地であったため、農地解放されることは難しく、田峯村の計らいで裏谷分校の2教室と物置を借りて共同宿舎とし、開拓への入植準備をしながら待ちました。



昭27年当時の裏谷分校 「清嶺中学校閉校記念誌」より

昭和23年に国有地が払い下げられて、県の開拓事業として発足しました。1戸分の配分は約27haでした。満州の苦しみを思えば何でもないと張り切り、主人と開拓の鍬を振りました。匪賊は出ないし殺されることもない。貧乏も恥ずかしくない。普通でしたらこんな山奥に進んで暮らす人はいないでしょうが、ここは親子3人にとっては安住の地でした。何年か後に、道路工事や個人宅地の造成を共同作業で行い、山の木を切り、我が家

も丸太作りで建てることができました。ランプでの生活ではありましたが。

開墾作業中の現金収入がないうちは、山の木を切り売りして生活費にあてました。苦しい開拓が続くなか、だんだんとここを離れる人が増え、残ったのは3人だけでした。

50年がたち、大きな道路が整備され、観光でこの高原を訪れる人も増えました。3人の子供も成長し、孫もおります。苦勞を共にした主人に、これからという時に先立たれ、私は今、山の中で一人静かな生活を楽しんでいます。80歳まで生きられ、感謝の気持ちで暮らしています。

満州開拓団の大陸で亡くなっていった人たちのことを思い、もう二度と、どんなことがあっても戦争はしてはいけないと思っております。そして後世に、このような残酷で悲惨なことが決して起こらぬよう、よく知っていただきたいのです。

小中学生も読みやすいように修正させていただきました。

以下は、令和6年2月24日に裏谷を訪れた記録です。

八名郷土史会 安形茂樹



キミエさんが過ごされた山中の一軒家



令和6年2月の裏谷 かつて開拓された土地

古田キミエさんが過ごされた家は、裏谷の集落からさらに2kmも奥に入った山中にありました。まさに、ぽつんと一軒家の世界で、キミエさんの二男の安夫さん（73歳）が稲武へ勤めながらたった一人で暮らしてみえました。

古田安夫さん（昭25年生まれ）の話

当時は付近の山中に、4軒ほどが牛の飼育や高原野菜を栽培していました。木を伐採すると焼き畑にして、その後で野菜を作った覚えがあります。裏谷分校まで約6kmの山道を5・6人で歩いて通いましたが、雪の深い日は歩くのも大変でした。父親の県一は、満州で召集されましたが、ケガをしたため早く帰され、広島の呉から戻ったと聞いています。父親は当時のことはあまり話したがらなかったですね。子どもは3人で、長女の由子と長男の光夫はあま市に住んでいます。私は稲武の会社へ勤めながら、ここで一人暮らしをしています。鹿といっしょに静かに暮らしているようなものですが、何の不自由もありませんよ。